

連載 保険ERM基礎講座 《第28回》

パラダイムシフト(その3)

有限責任監査法人トーマツ

ディレクター 後藤 茂之

1. 資本最適化の強化

不確実性の高まりは、予想外の損失の可能性を高める。それを担保する資本の充実の要請が高まるのは自然の流れである。同時に、いかに資本を効率的に管理するかについて関心が高まっている。

2. マクロブルーデンスの視点

金融危機以降の保険規制には、金融システムへの影響をモニタリングするマクロブルーデンスの視点が新たに導入された。



【後藤茂之氏プロフィール】

大手損害保険会社および保険持ち株会社に、企画部長、リスク管理部長を歴任。日米

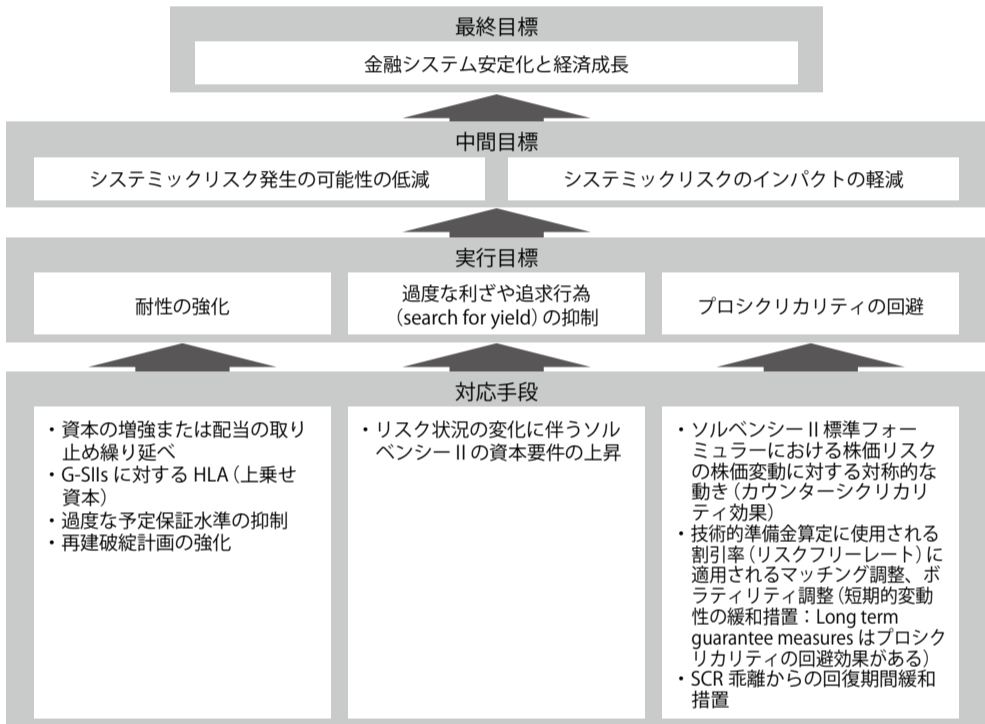
デロイトのサーベイ(注1)によると、欧州保険業界では、過去5年間、ソルベンシーIIに対応するため、資本を充足するための各種取り組みがなされたとの回答が寄せられた。例えば、資本管理方針の明文化(88%

保険交渉、合併・経営統合に伴う経営管理体制の構築、海外M&A、保険ERMの構築、グループ内部モデルの高度化、リスクア

ペタイト・フレイムワーク、ORSAプロセス整備に従事。IAIS、Geneva Associates、EAIICなどのE

大阪大学経済学部卒業、コロンビア大学ビジネススクール日本経済経営研究所・客員研究員、中央大学大学院総合政策研究科博士課程修了。博士(総合政策)。

図表 長期低金利に対処するためのツールと目標



(出典:EIOPAレポート「長期低金利下における域内マクロブルーデンス対応」の「図1:長期低金利に対処するためのツールと目標」を試訳)

てグローバルの保険資本基準(ICS)の論議が進んでいる。当該指標の議論においては、単純で、整合的な尺度を使うと比較可能性が重視されている。この根拠には、グローバルに活動する保険会社グループのリスクポートフォリオをマクロブルーデンスの観点からモニタリングする指標を確立しなければならないという要請がある。ただ、マクロブルーデンスとミクロブルーデンスの目的は異なるため、両者の指標間の整合性をとることは簡単ではない。ま

低金利が長期化する。と、保険会社の取る行動が金融市場の不安定性を助長する形で働かないようその行動についても規制する必要がある。このようなプロシクリカリティの回避として、ソルベンシーIIでは、長期保証措置(Long term guarantee measures: LTGM、短期的変動性の緩和措置)やソルベンシー資本要件(SCR)からの乖離(かいり)からの回復する期間の緩和措置が導入されている。保険負債の市場整合的評価は、将来の保険金支

払いや発生コストを現在価値に割り引く方法で把握される。ソルベンシーIIでは、保険負債は、技術的準備金(Technical Provisions)と呼ばれるが、その算出において市場整合的なりスクフリー・レートを用いる。しかし、保険でカバーしている危険に影響を及ぼす危険事情(ハザード)が変化すれば、危険集団(リスクポートフォリオ)のプロファイロも変化する。それ故、環境変化が激しいときほど、保険危険が内包する不確実な要素に対しフォワードルッキングな管理が必要である。換言すれば、過去の傾向が将来の予測にそのまま使用できない環境においては、大数の法則に基づきつつも将来トレンドを加味したブルー管理が求められる。ここで将来トレンドに対する感度を高めるための視点について考えてみたい。保険が扱う危険は、日常生活、企業活動に深く関与している。それ故、危険の変化に敏感になることは、社会や経済に影響を及ぼす科学技術の変化やそれに伴う経済活動、社会活動への影響、さらにはそういった変化に誘発される経済・社会構成員の保険ニーズの変化を的確に捕捉する必要がある。リスクに対する人々の認知、価値観に関心を払う必要があると同時に、新たな機会(リターン)やリスクを容認する企業活動のありよう

3. リスク社会という視点

保険は、同種の特性を有する危険集団を構成し、その集団内での相互扶助を可能とするため、収支相等の原則で運用する制度である。大量のデータを観察すれば、そこに一定の法則が見いだせるという大数の法則に依

り、このような社会のことを、「リスク社会(Risk society)」と呼んだ。ERMを社会学的視点で検討する必要がある。(111)

や生活のありようについても深い理解が求められる。その意味で、経済学とは異なる視点、社会学の立場からリスクを理解する必要がある。リスクは、経済的価値との関係やその処理の経済的効率性の観点だけから見えてこない領域が存在する。社会生活という視点からリスクを見る場合には、人々がさまざまな生活領域の中でどの領域を重要だと考え、充実させたいと考えているのかに思いをはせる必要がある。社会学では、技術的「安全」と社会的「信頼」を通じた「安心」の確保といった両面を重視する。信頼は、時代によっても変化する。個人の価値観や主観的要素が変化するためである。ここでは、社会的コンセンサスを得るためのリスクコミュニケーションが不可欠となる。社会学者のベック(注2)は、科学技術の構造や社会制度の構造に原因を持つリスクを、「現代的なリスク」と呼ぶ。彼によれば、地震や津波といった自然災害に対する恐れや不安を生み出すリスク(古典的リスク)をコントロールしようとして、われわれは、科学技術を進化させてきたが、近代が生み出した技術や制度自体が発生させるリスクが、人類を脅かすといった新たなリスクが社会に充満していると指摘

注1) ウルリヒ・ベック『危険社会―新しい近代への道』東廉、伊藤美登里訳、1998年、法政大学出版局(文中の意見に当たる部分は執筆者個人のものであり、所属する組織のものではありません) ◆この連載は隔週木曜日に掲載します。